雑詠日記

海蝶夢話　巻の四　二〇〇九年

市井一人

桑原武夫は、西洋文学に比べて日本文学全体を批判する文脈の中で、俳句について「第二芸術論」を書いた。それよりもずっと前に、自ら短歌を作っていた釈迢空こと折口信夫は、「歌の円寂する時」という文章を書いていた。

歌は此の上伸びようがない、……歌は既に滅びかけている……。歌を望みない方へ誘う力は、私だけの考えでも、尠くとも三つある。一つは、歌の享けた命数に限りがあること。二つには、歌よみ…が、人間の出来て居な過ぎる点。三つには、真の意味の批評の一向出て来ないことである。……古典なるが故に、稍変造せねば、新時代の生活はとり容れ難く、……抒情詩である短歌の今一つの欠陥は、理論を含むことが出来ない事だ。…口語律が、真の生きた命のままに用いられる喜び…。…更に、近代生活をも、叙事味の勝った気分に乗せて出すことが出来る。……

三十一字形の短歌は、おおよそは円寂の時に達している。

短歌・俳句の限界が指摘されて久しい中、現代詩も停滞していると、新聞が詩人にインタビューする時代にいる。わたしは最初からそういうことを意識しながら、またアマチュアの限界を承知しながら雑詠を記してきた。その雑詠記録が今年のように貧弱であれば、いよいよ円寂を覚悟しなければならないだろうか。

一月一日

老夫婦雪の年明け一息す

一月九日

想念がめぐる冬の夜言葉待つ

一月十日

山に雪笹に小判で恵比須顔　（家族は十日恵比寿）

引き当てて孫が喜ぶ招き猫

年初め多弁の友を欠いた会

中天に円月相の大いなる姿を仰ぎ寒の道行く

一月十三日

草原と断崖を行く大黄河羊の皮の筏は下る　（昔の番組）

一月十四日

九連のパンダの凧が舞い上がる孫と一緒に嬉々として見る

老健へみぞれに虹の立つ道を

一月二十四日

ミニチュアのダルマを置いて山陰の雪道を行くシテと幼な児

ひよどりが雪の梢を超える声孫と見上げて陽射し授かる

雪散らし海人閉じ込める志賀の海

蛍見た橋にシテ立つ寒の雪

一月二十九日

碇打ち雨に日をなす寒の鴨

肚すわる日をなさず在る老いの冬

二月四日

眼の検査受けてまばゆい春立つ日

二月十二日

水仙の香気に染まり朱子を読む

天の命春一番に起こされる

春一番吹いて北への道に虹　（とても低い虹）

二月二十三日

菜の花を食う人の身のこの苦さ

三月一日

公園に春を始める子等の声

石垣にいのちを懸ける雪柳

三月四日

ぬるむ水螺旋回路を中心へ、そこから孫は渦巻き外へ

三月六日

生家に残っていて使わなくなったもろもろのものを捨てた。

春雨に濡れ大小のモノ捨てる記憶をはがしささくれだって

三月八日

侘助の蜜に命を継ぐ目白

腹すかす金魚の池も水ぬるむ　（日ごろ留守の池）

旅立ちの雁後にする浦に居る

三月十日

芝刈って蛙トカゲの目を覚ます

甦る草木に寄って生気吸う

三月十一日

如月の月に小声で声かける
敬保持し白い椿に就く目白
如月の波が奏でる月の詩　（太陰暦二月十五日）
鈴連ね月の光に鳴る馬酔木

三月十五日

春陽射し焼杉褪せた終の宿
春の青終の住処の前の海

三月十八日

一人居に足早の春草を抜く

三月十九日

ふる里の海を高みの墓と見る
天保の墓に桜の若木咲く
墓参終え二枝手折る藪椿

慎ましいしきみの花を墓に挿すわずか十日のいのち得た兄

咲き急ぐ桜を見つつふる里で老いへの暮らし試みている

早春の風にあおられ鉛直に翼を広げ抗する鴎

三月二十日

彼岸寒此岸に迷いおはぎ食う

愚痴の身も彼岸を望み食うおはぎ

甘露待ち天のひしゃくを仰ぎ立つ

社会学者吉田民人という人の本に、「一流の読書家、批評家になるより、ささやかなりとも作家でありたい」という言葉があった。

三月二十六日

生家のささやかな改造が終わった。

名刹の花の向こうの雪の屋根

歳重ねまた桜見るしみじみと

三月二十七日

脳揺られ我が状況を省みる交々のこと受け入れるのみ

この今が天意と思い草に座し花の彼方の海を眺める

蝶出でて夢から覚めた夢に入る

大きな家具と書物を生家に引っ越す作業などで、日が過ぎる。

四月二十三日

言霊を、山藤を透く風に聴く

名を入れた幟立つ家にピアノの音

五月八日

漱石の大患の詩を味わって円かな月の光にひたる

五月九日

風薫る林虫網持つ母子

青葉湧く森を出た月ふくよかに

五月十日

母の日に防腐剤ぬる子も老いて

五月十一日

新しい時計が逸す老いの春

時刻む蛍光の針春の闇

五月二十四日

バラ死んでプランクトンが生まれ出る

五月二十九日

目に立たずなお匂い立つ栗の花

行く春や白装束の照る坊主　（明日は孫の運動会）

六月二日

富を呼ぶ青大将を追い払う

大粒の木イチゴを得た孫の顔

六月六日

雨季間近浦の苫屋に萩が咲く

波音を草のかんざし抜いて聞く

紅白の睡蓮夢に語り合う

ビワに就く青大将は智慧探す

六月八日

無量寿経骨壷で聞く叔母送る「説我得仏」願かける

喉ぼとけ念仏のため分骨す

七宝で飾る須弥壇百合の花

骨納め風にふるえる早苗見る

六月十五日

腕の中別の世界を紡ぐ孫

夏迎え樹液の音のこもる山

六月十八日

海牛のごとく豊満再生を始めた芋の数多の角よ

六月十九日

蛍火に手をさし伸べて飛び立つ子

六月二十日

相応に老けた鏡の顔に言う歳相応の覚悟はまだか

六月二十五日

孫連れて勇んで入る林には閏五月の山桃乾く

六月二十七日

生き死にを見据えた言葉未だ出ず亡き人偲ぶ会合に出て

七月三日

ありふれた物を見る眼の代わりに
後尾にあざやかな眼を持つ
青虫は日の下に何を見ていたのか
ゆるゆると過ごすうちに
蟻の群れに身を献げて

「五月闇」

このように
人それぞれに
人生が過ぎて行く
自分が
そしてすべてのものが
夜の闇に溶け果て
研ぎ澄まされた感覚が
その空虚に

世界を聴こうとする
賢者と言われた人は
この過ぎ行きをしばらく
とどめることが出来たのだろうか
そこに何を聴いたのだろうか

七月六日

湯をかけて百足を退治もののふぞ

七月十日

大雨が芥集めた岸に鷺

水走る峠鋭い鳥の声

まだ若い合歓打つ雨の深き情

七月十二日

無花果を起こし花ある実をめざす

晴耕で身を消尽し梅雨老いる　（平生則辞世、芭蕉）

七月十五日

「帰省の道で」

終末を飾る豪雨が行く手を隠す道を／　ただ眼の前のことを見ながら進む／　わたしだけのことではないらしい。／　すべての谷から枯れ木も青葉も／　動物の亡骸もダム湖に集まる／　そのいなか道に幸福実現という文字が見える。／　政党のポスター、何という平明な主義だ。／　ああ、ぜひともそう願いたいものだ／　自由と民主主義がすたれた時代には。／　その理念など真剣に考えたこともみなかった者たちが／　それを掲げてすり切れさせた後には。／　社会主義を万人のためではなく、／　自己のために利用した者たちを見てきた後では。／　われわれには、公明とか、幸福とか、／　一般的な徳が似つかわしいとでも言うように。／　しかし、日の下に徳が実現したことはなかったから／　それらの徳が尊重されるのではないか。／　政治闘争の世界にそのような徳の旗を立てる者は／　その徳を言葉と一緒に汚すだろう。／　よく見る者は政治に幻想など抱かない／　しかも理念を掲げて進む。／　人間の社会に必要な自由や平等を尊重し／　しかも社会の問題に立ち向かい／　現実を動かす行動をさぐりながら。

七月二十一日

四歳に鳴くクマゼミの声教え世界を一つ分節化する

七月二十二日

梅雨明けを日の剣と月仰ぎ立つ　（日食）

日の剣が右往左往の国を撃つ孫の世代の行く末案ず

七月二十五日

天神も阿修羅にも会わず蝉の森

八月二日

円環の雲に包まれ淡い月盲いたひとの諦観の詩よ

八月七日

月の出を寿ぐ雨の後の蝉

八月八日

餅踏んで一つ歳をとる孫と祖父

時追って日ごとに蝉の宵囃し

八月九日

盆参り息子の顔に友を見る

八月二十五日

変調に老いのたじろぎ朝の秋

空蝉も夏の疲れにめまいする

八月二十九日

人は息をしていて

光を認めることができ、
音のする方へ顔が向き、
触れられると反応の動作をし、
声をかけられれば眼を見開くことができる間は、
生きている価値がある。
そのように人間は人と接する。

八月三十日

浪花節聞いて蘇州の船を待つ　（中国へ出発）

大船に並び波間を飛ぶ鴎　（一羽）

ユートピア、豊浦の山夕闇に消えて海原はるかを目指す　（船の名）

なお秋を訪ねて海を渡る蝶

運命という決断を生きる秋

八月三十一日

大海の波頭の砕く泡と化す

絶海の船に小鳥は身を託す　（この世の生は小鳥と人と異ならない）

ただ海に対し生業為す漁師

一日中陸地を見ない海の上を船は進む。わたしは円周で縁取られた海平面の中央にいる。海のうねりとその上の小さな波の揺らぎだけが、時の経過を教える。見上げるとゆっくりと変化する雲も、長い長い歳月のつかの間の、同じもののない風景をつくっている。

海から出て海に没する日に見入る

落日は没し十日の月出だす紺青の海濃く塗りこめて

漁り火が海と空とを画す闇

秋風と月の光に揺れる海

＊＊＊＊大学の宿舎に寄宿して始まった上海での生活は、当然ながら多事であった。

九月五日

呉の暑さ身にしみて見る赤とんぼ

東方に真珠そびえる大き国

九月六日

双龍に乗って迎える秋の月

望月が横切る浦江の摩天楼

九月十三日

シャボン玉思源の池に回帰する

片鱗を思源の池に見せる鮠

九月十七日

物思えば思源の池に秋の雨

疲労して梨むいて食う旅の宿

使命を果たすのに骨折っている。スカイプでの家内の質問をきっかけに、「釣月耕雲」という魅力的な句のある道元禅師の詩を知った。

九月二十日

上海博物館などに行く。

コーヒーの苦さ味わう新天地秋の風吹く木陰の下で

編鐘の音色に晋の秋を聴く

夫差の盃に円やかさ見ていぶかしむ

時を経た呉王の剣の微光見る

西漢の五牛の枕夢を待つ

紅塵の人民広場蔓珠沙華

紅塵に迷う旅人秋彼岸　（中国人に道を聞かれた）

秋雨に見知らぬ鳥と異邦人

もの言わず物食い暮れる秋彼岸

九月二十三日

九月二十六日

コーラスがかつて租界の公園に響いて咲かす木犀の花　（復興公園）

マルクスとエンゲルスとの石像がダンスを踊る市民見守る

困難な使命の任を周公が果たした部屋に残るトランク　（周公館）

建国の孫中山と賢夫人暮らした家に歴史がにじむ

周公館という名付けは、周公旦を思い浮かばせる。周の武王の弟は周王朝の礎を築いたが、周恩来も新中国の礎を固めた。新旧二人の周公は人品のよさというイメージを喚起する。周恩来が日本人捕虜・戦犯に当時中国人に行き渡らなかった米を支給したというエピソードは、あの端正な風貌にそなわった品性を教える。

九月二十九日

上海で何がしか為し秋半ば

九月三十日

大学の大ホールであつた国慶節の前夜祭を見物した。人々が高揚感に染まっていることを感じる。己丑の革命から暦が一巡りした年に、大いなる成功を収めつつあることを皆で祝福しているのである。続いて雨も上がった会場の外で、花火が打ち上げられた。

臨場する国慶節の前夜祭

ウイグルの娘も国を祝い舞う

中国の国の還暦花火舞う

仲秋の夜空に数多昇り龍

十月一日

国慶節朝の天安門前の延々二時間半続くパレードと、夜の祝典をテレビで観た。

紫禁城前の大道精兵が威儀を正して行進をする

大唐の隆盛今に甦る祝典の夜迷い来た蝶

十月三日

午後上海南站発の「和諧号」で紹興へ一泊の旅へ。大学院生の＊＊君が案内してくれる。ホテルは相部屋。

中秋に浙江の稲まだ青く　（二期作か三期作?）

秋熱く砂舟ゆるく運河行く

菱の実を採るたらい船、水の郷

閉館まぎわの魯迅故居をさっと観た後、人力でこぐ三輪タクシーで、市の中心部にある越王台へ行った。わたしよりも年上と思われる老人が、われわれ二人を乗せて苦労しながら石畳の道を進んだ。

輪タクで越王台の秋訪ね

中秋に越王殿は門閉ざす

句践の春秋の夢露と消え

夕方、沈園のそばのレストランで夕食をとった後、沈園内を見て歩く。快晴で、美しい中秋の名月が上がってきた。『地球の歩き方』に、「宋の詩人陸遊が結婚した唐婉と、折り合いの悪い母によって別れさせられた。後にここで再婚した元妻と再会し、その心中を詩に託して壁に刻んだ」という挿話が載せてある。陸遊と唐婉とは従兄妹同士であったと、＊＊君が教えてくれた。園内には、陸遊の詩に対して、同じ詩題・同じ形式で唐婉

の作った見事な返しの詩が並べて石碑にしてある。詩の題は「釵頭鳳」。

ランタンに句と絵を添えた回廊をめぐる沈園名月の夜

名月の下で悲恋の劇に泣く

名月に届け悲心を歌う声

中秋の夜空漂う朱の気球

十月四日

国慶節の連休に合わせて紹興市が運行している無料バスで、東湖、会稽山、蘭亭を巡った。この紀行文は別に書いてみたい。

鍬を持つ禹の汗を吹く秋の風

王義之の別墅に迷う海の蝶

風流を尽くした書法春の宴

秋蘭を下げて蘭亭辞す男

十月五日

先日、去年周庄へ案内してくれた女子学生のことが話題になった時、お礼のメールに詩をまねたものを添えたらお返しに詩が戻ってきた、という話をした。それを思い出した＊＊君が、紹興を観光中に、詩ができるのではないかとわたしをけしかけた。夜、その誘いに乗って漢字を並べ、案内してもらったお礼のメールに付けて送った。

Dear ＊＊,

Thank you very much for having taken me to a trip to ShaoXing.

I really enjoyed the trip.

You suggested that I make a poem. But I cannot make Chinese sentences.

I can only put seven Chinese characters in four lines as follows.

「紹興尋秋、些排列漢字」

其一

蓬莱游子自海来

中秋閉門越王殿

名月皎皎虫奏楽

喜楽千秋夢中践

其二

中秋月下座沈園
池前越劇生悲心
陸游唐婉詠心裏
月桂開花清香新

Best wishes,

十月七日

返信が来て、やはり詩が添えてあった。

Dear ****,

It is my pleasure to travel with you to Shaoxing.

I am so surprised that you have a high level to write Chinese traditional poem. Although I am not good at poem, I try my best to write one to you by courtesy. Please point out mistakes so that I can correct it.

・・・・・・

与＊＊老师游绍兴

盛世甲子逢佳节，
鲁迅故里喜相游。
沈园兰亭会稽悦，
异邦师徒情谊留。

中国語を話せない者が詩のようなものを送ったので、＊＊君は幻惑されたようだ。きっとおかしな点があるにちがいない。

十月八日

連休中に仕事をして、人出の少なくなる今日、三峡下りに出発した。重慶に飛び、朝天門嗎頭の客船に一泊して明朝の出発を待つ。夜中に目が覚めたときに寝つかれないままに、蘭亭を題材にまた漢字の列を作ってみた。

山沢残暑聞川音
探千古雅淡竹径
曲水詩宴夢幻中
只見秋蘭辞蘭亭

十月九日

朝霧の朝天門でもやい解く

霧の中行く手も見えぬ大河行く長江公主時の流れと

（この公主は少しお歳を召しておられた）

川鳥が長江なめて秋を飛ぶ

秋雨に一葉の舟網上げる

悠久の流れを掬う採砂船

「長江の流れに座して」

長江湛水無波浪

軽衣旅人乗大船

杜甫詩心正可汲

古今不易人生川

霧の夜の公主の殿に巫女の舞い

十月十日

喫水が水切る音に目を覚ます白帝城は朝霧の中

山々が水に入る峡しずしずと詩人を偲び船進み行く

水面の上昇もなお事もなし峨々たる山は悠然とある

湖となった三峡降る雨の水輪を見つめ明日を思う

観音が崖で見下ろす秋の水

「無題」

船行秋雨巫山下
霧笛響谷山影聳
神女不欲会老生
手携杜詩無声詠

十月十七日

仕事に励んでいたら、土曜日の今日、朱家角へ誘われた。

旬の蟹食えば水路に手漕ぎ舟

放生の橋見て魚を食べる秋

翰林の中で鐘聞く阿婆茶楼

扁額は幾多の秋を見て褪せる

水郷の春夏秋冬素描したささやかな絵がわたしのみやげ

二か月を過ごした園に落ち葉散る思源の池は事無げにある

広大なキャンパスの中三日月と木犀香る宵の道行く

「李三娘」旅も終りの秋の夜に観る演劇は感涙誘う

十月二十一日

感傷的になっているのか、テレビの劇に涙する。「白兎記」とも呼ばれるこのストーリーは人々に愛されているに違いない。インターネットで、後漢を建てた劉知遠のことを知った。Wikipediaに、李皇后となっている。

使命もおおよそ果たせて、わたしの滞在も終りになった。十月二十二日に、家内と妹が上海に来た。

十月二十四日

「訪寒山寺」
秋天境内丹桂匂
詩碑永聞読経声
寒山拾得已遠古
人間難為飄逸生

十月二十七日に帰国して、日が瞬く間に過ぎる。十二月に生家のある故郷へ帰る日程を決めて、またあわただしくなった。

十一月七日　つわぶきの花が黄蝶を朋とする

十一月十七日　まだ生きて時雨の鐘に目を覚ます

十一月二十七日　生き難い世にあるわたし美しい生き方探し幾代もある

十二月三日　白頭鳥に時の移ろい気づく朝

十二月七日

悪夢見て不安に満ちる暗闇に老人一人平安祈る

十日に、家内と、老母を連れて故郷へ引っ越した。

十二月二十日

シャリンバイ植える、寒風吹く生家

晴耕の手始めにまず木を植える書を読むことをおざなりにして

十二月二十三日

念仏を冬至の明けた寺に聞く

木魚打つ供花ふるえる寒い堂

十二月三十一日

浜辺に住む老青鷺と
年越しのあいさつ交わす

あなたには帰去来の辞を送らなかったけれど
あなたがここに飛来するずっと前から
わたしはこの岸に住んでいました
どうぞよいお年を。

この岸に住むのは短いけれど
あなたよりもぎりぎりの生を生きていますから
あなたに教えることもありましょう
わたしは以前にはあちらの岸におりました
どうぞよいお年を。

喜びと悲しみと、ともどもに、鷺とわたしと年を越す

二〇一〇年　正月
白江庵　謹製

『創造者』から抜粋
J・L・ボルヘス

「ここでも何世代もの人間が、ありふれた、そしてある意味では永遠に変わらぬ、芸術の素材となるべき運命の浮沈を経験した」
「忘却によって消し去られるか、記憶によって変化させられるかしないものは、地上には一つとして存在しないのだから」
「世界のからくりは、人間の単純な心にとっては余りにも複雑だからである」
「わたしの運命という、この夢を支配する隠れた法則、すなわち明らかな偶然が」
「時と血と苦悩であるこのわたしが時の過ぎ行くのを受け入れられないのだ」
・・・・・
わたしの身には僅かなことしか起こらず、・・・